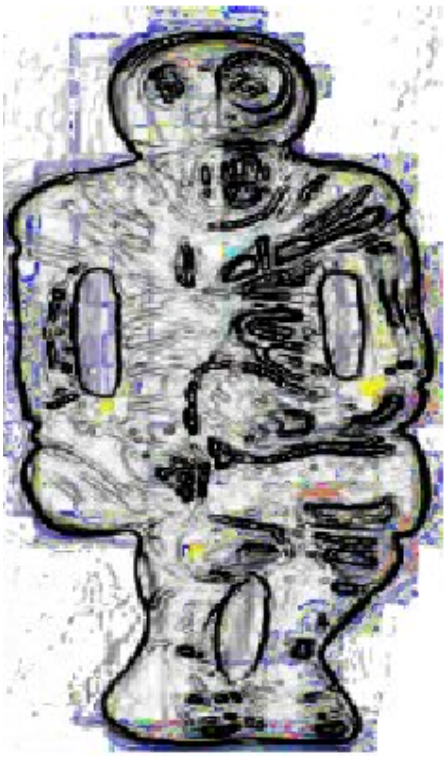

暗闇の力

ながのとしお

宇宙を構成するエネルギーのうち、目に見える物質はわずか四パーセント、他の二三パーセントは目に見えない暗黒物質で、これらはさまざまな観測データからほぼ確実な割合とされている。そして残りの約七三パーセントを占めているのが謎の暗黒エネルギーである。

暗黒エネルギーの正体は、宇宙誕生以来、空間そのものがもっているもの、膨張（インフレーション）やビッグバンをもたらした真空のエネルギーに相当し、重力と反対の作用をするエネルギーと考えられている。

きみたちは大変な時代を生きている。気づいているにしろいないにしろ、それは確かに大変な時代なのだ。

一瞬一瞬が生と死の分かれ道であり、そのことを覚悟しない限りきみたちはよく生きることができない。そして実際きみたちはよく生きることができないのだから、宙ぶらりんのまま生温かい湯に浸かりながら執行猶予の時をその生が尽きる瞬間まで味わい続ける、それ以外に選択の余地はないのだ。そのことが良いか悪いかなどと問うのはやめにしよう。なにしろきみたちは善も悪も存在しえない時代を生きているのだ。存在しもしないそうした価値観についすがろうとしてしまう瞬間がきみたちには確かにあるだろう。だが、それが気休めにすらならないこともすでにきみたちにははっきりとしている。そもそも、自分がそのようにはっきりと理解していること自体きみたちの想像の

埒外にあるのだが。

ところで勘違いをしてほしくないのは、大変な時代を生きているのは別にきみたちだけではないということだ。様々な甘いシロップや耳に心地よい音色の色眼鏡を通して語られる「昔は良かった」とか「自分の若い頃は」といったお伽噺を聞いてきみたちはこんな時代に生まれなければと何度思ったことだろう。しかしそうした話が過去という名の不確かな存在へと試みられる単なる希望的観測にすぎないということもきみたちにとっては明らかすぎる話だ。過去は記憶にすぎず、その曖昧な記憶がさらにあやふやな言葉として語られるだけのことなのだから、そんなものには一片の信頼もおくことはできない。よしんば「素晴らしい過去」というものがかつて存在したと信じられるにしたとて、それはきみたちにとって何の助けにもならないのだし、実のところそこで起こっていることはといえば、過去を振り返るときに良い思い出は心地よく思い出し、悪い記憶はその痛みも薄れて淡いベールの中、美しい記憶に変身させられるというありふれた光景なのであり、つまりそう、大変な時代というのは何もきみたちの専売特許ではない、意識というものが生まれてこの方ずっと続いてきたごく当たり前の現象なのだ。

そのことに改めて気づいたところできみたちが抱える大変さが少しでも軽くなるかといえばそういうこともない。「いやあ、おれたちの時代はなんだか大変だとおもってたけど、昔からずーっとこんなもんだったのか、それじゃぁ仕方ないな、一つ前向きに生きてみるとするか」とここでもし思えるとすれば、それは明日をも知れぬ我が身という思いがその心の底に覚悟としてあるからに違いないのであって、それができぬからこそきみたちはここでも宙ぶらりんのままに留まらざるをえないのだ。そしてきみたちは次のようなぼやきをつぶやくことになる。「なんだって？　昔も今と変わらず大変な時代だったって？　だったら一体この先おれたちはどうなっちまうっていうんだ!?」

現在という執行猶予と、過去の非在あるいはその無意味性……だとすれば明日には、未来には何らかの希望が残っているのだろうか。きみたちは無論明日になぞ大した期待を持っているわけではない。未来は不確かなものであり、それは希望というよりはむしろ恐怖を意味する。今日までは確かになんとかやってこられた。だからといって明日以降もうまくやっていけるという保証が一体どこにあるというのだろう？　そんな保証は所詮どこにもないのであり、だからこそ転ばぬ先に杖を出し、石橋は叩いて渡り、天気の日にも蝙蝠傘を差してきみたちは未来という災害から身を守ろうと懸命の努力をする。だが悲しいかな、きみたちは生まれ落ちた以上いつか必ず土へと還る運命（さだめ）なのだ。現在が執行猶予である以上、未来もその続き以外の何ものでもあり得ない。

そしてきみたちは大変な時代を生きている。いや、大変な世界の中で、きみたちこそが大変な時代を造り出しているのだと言ったほうが正確というものだろう。そう、きみたちの全てが一致協力して生み出

した賜物なのだ、この大変な時代という代物は。きみたちはとんでもない曲芸をして日々この大変な時代を造り出し維持し続けている。自分が曲芸をしているということに気づかぬままにやっているのだから、これはまた大した曲芸だ。そのためにきみたちはまず自分の心を欺くことから始めなければならなかった。そしてその訓練はきみたちが生まれ落ちたその瞬間から開始されていたのだ。やがてきみたちは自分で自分を欺いているのにそのことに全く気づかないという離れ業をやってのけるまでに至った。そうやってきみたちは大人になったのだ。

そういう事情であるからには、きみたちが「おれたちはこんな時代を作った覚えはない」というもの無理からぬことだ。きみたちはそれに気づいていないからこそきみたちなのだし、それに気づいていないからこそ永遠の執行猶予を生き続けなければならないのだ。

それにしてもきみたちが造り上げているこの大変な時代というやつは実のところとてつもない芸術作品と言わざるをえない。奇怪で醜く残酷で、しかも同時に儚い美しさと久遠(とこしえ)の荘厳さに満ちている。人と人が殺し合い、人が人を食い物にし、人と人が互いに足を引っ張り合う。そうかと思えば、ある者は一人で、またある者たちは手に手を取り合って、この世界を讃えるために歌を歌い、絵を描き、祈りを祈る。そしてきみたちはこの二つの面のどちらからも本質的に切り離されたまま、その残り滓だけを餌に与えられて、それを嬉々として喰らうのだ、つまりはそれがきみたちの運命(さだめ)なのだ。

とすればまずは、きみたちに祈りを捧げるところから始めるのが順序というものかもしれない。

自分というものを知ることもなく
生れ落ちて土に還る
きみたちに幸あれ

自分がそうしているという自覚も持たぬまま
この奇怪な時代を造り出す
きみたちに誉れあれ

大変な時代を生き続けているうちにある日きみたちの中からきみたちであることをやめようとするものたちが現れる。それらのものたちは実のところ初めからきみたちとは違ったものたちだったのだ。違ったものたちではあったがきみたちの中にあってきみたちの振りをするほどにはきみたちに合わせることができたから、その日まで違ったものたちであると気づかれないでこれたのだ。なにしろきみたちはきみたちと違うものに対して容赦がない。即座に排除して隔離する。きみたちの振りができなかったものたちはそのようにして切り捨てられてきたのだ。

違ったものたちがきみたちであることをやめようとするとき同じ問題が生じる。心構えもなしにうかつにきみたちをやめてしまえば間違

いなく切り捨てられる。切り捨てられずに生き残るためには自覚的にきみたちの振りをしなければならない。というのも違ったものたちはきみたちの中で育ったために半ば無意識にきみたちの振りをしてきたにすぎないからだ。生き残るために必要だったから、そうせざるを得なかっただけの話で、自らの決断でそうしてきたものはほとんどいない。そしてここで要求される自覚的な決断こそがやがては死を覚悟して生きていくことにつながり、それがさらには自由へと至る道への第一歩となるのである。

とはいえきみたちには違ったものたちを羨む理由はこれっぽっちもない。なぜなら違ったものたちのうちで真に違うものとなることのできるものは実に少ないのだから。幾億もの精子のうちで卵子に辿りつけるものがたった一つしかないことにも似て、違ったものたちの大多数は道半ばで倒れ、切り捨てられ、消え去っていく。その過酷な道行きのことを思えばきみたちは次のような思いで自分の気持ちを慰めることだろう。「なるほどおれたちの人生は決して楽なもんじゃない。こいつは確かに大変なんだが、不確かながらも安心はある。その小さな安心を捨ててまで別の道を選ぶなんてそんな危険な賭けが割に合うわけがない。おれたちはおれたちの道を行くさ。平凡だろうが退屈だろうがそれがどうしたっていうんだ。おれたちにはおれたちの幸せがあるんだ」

ところがそう思った頭の中の舌の根が乾かぬうちにきみたちの胸は不安で一杯になる。限りない気休めと数え切れない息抜きを繰り返しているにもかかわらずその不安は消えることなくいつだってそこにあったのだ。そしてこの重苦しい毎日の繰り返しをいつまで続けていけるのか、きみたちにはいささかの自信もない。

そこに至ってきみたちは気づくのだ。きみたちは深い暗闇の中、明かりも持たずに生き続けるしかないということに。暗く絡みつくよどんだ洞窟の闇の中、夜明け前が一番暗いという言葉だけを頼りにきみたちは歩き続ける。幾億の精子の一つとして勝ち残ってきたきみたちとはいえこの先どこまで生き続けられるのかということについては何の保証もない。そして違ったものこそきみたちそのものであるという真実に気がつく可能性は残念なことにきみたちには残されていない。その違いこそがきみたちであり、暗闇の力であり、きみたちにはそれは弱々しい燦めきにしか見えないだろうが、その微かな光こそがこの世界の力の尽きせぬ源泉であるというのに……。

［二〇〇七年六月　ちば・いちかわ］

参考文献　沼澤茂美、脇屋奈々代「宇宙の辞典」ナツメ社二〇〇四